

Dickens の読者と読者 Howitt  
『幽霊屋敷』をめぐる論争  
Dickens's Readers and the Reader Howitt:  
A Dispute over *The Haunted House*

小野寺 進  
Susumu ONODERA

I

Dickens が死んだ時、子供たちは“Dickens dead?” “Then will Father Christmas die too?”と口々に言ったという！英文学史上、真っ先にクリスマスを連想させる作家と言えば、Dickens の名前が思い浮かぶであろう。彼は *A Christmas Carol* や *The Chimes* などの作品をその代表作とする数多くのクリスマス物語を書き、また彼が編集した雑誌 *Household Words* や *All the Year Round* などに、クリスマスが近づくと「クリスマス特集号」と題して、多くのクリスマスに纏わる物語を掲載したりした。その多くで物語の中心的役割を果たしているのが幽霊や精霊たちである。

Dickens は 1850 年代からイギリスで台頭してきた、霊の存在を信奉する心霊主義者と対立を見せることになるが<sup>2</sup>、特にその対立が作品を通じて表面化したのが、*All the Year Round* の 1859 年の「クリスマス特集号」に他の作家たちと合作した『幽霊屋敷』(*The Haunted House*) を掲載した時である。これが Thomas Shorter が編集する *Spiritual Magazine* 誌上で「ハウイト氏とディケンズ氏」(“MR. HOWITT AND MR. DICKENS”)として Howitt 側の一方的な論争へと発展することになる<sup>3</sup>。本稿では、こうした一方的な論争になった理由が、実は『幽霊屋敷』という物語テキストそれ自体に孕んでいることを明らかにすると共に、この物語が Dickens のクリスマス物語群の幽霊や精霊を象徴的に表していることを論じたい。

II

*Household Words* の常連の寄稿者であった William Howitt が、心霊主義を真剣

に研究し始めたのは 1850 年代半ばの頃である。心靈主義者たちは、人間が死後も存続し、霊が肉体を離れても活動できることを確信しながら、死者との交信の現実性を擁護すべく交霊会を開いたりした。そういった交霊会で行われるテーブル・ラッピング（交霊術中の霊と霊媒間の叩音による交信）はインチキであるとして、Dickens は *Household Words* の中でそれまで度々批判してきた。*Household Words* 編集時代、Mrs. Hayden を始めとする心靈主義者たちとの対立はあったが、*All the Year Round* ではその対立はより明確な形となって現れる。その発端は 1859 年 9 月 6 日付けの Howitt 宛の手紙へと遡る。その手紙の中で、Dickens は霊に対する深い関心と探究心があるだけでなく、「英国陸軍省の幽霊」も納得できる証拠がなければ信じることはできないと Howitt へ伝えた。更に同年 10 月 31 日に Howitt にイギリス国内にある幽霊屋敷を知っていたら教えてほしいとの旨の手紙を送る。Howitt から早々にロンドンのパブを含む幽霊屋敷のリストをもらった Dickens は、その正確な住所を知りたいと 11 月 8 日に、そして更に同月 15 日に Cheshunt にある幽霊屋敷を訪れてみる旨の手紙を Howitt へ送っている。そして 12 月 13 日に *All The Year Round* の「クリスマス特集号」として『幽霊屋敷』が合作で発表されることになる。

Dickens を始め、Hesba Stretton, G. A. Sara, Adelaide Procter, Wilkie Collins そして Mrs Gaskell たちとの共同で執筆されたこの物語は、幽霊が屋敷に取り憑いていないことを証明するために、語り手である John とその妹 Patty が召使を引き連れ、有名な幽霊屋敷へ行くところから始まる。ところが計画は失敗し、召使たちは不穏な物音や奇妙なものを見たりして、恐怖に怯えてしまう。そこで召使たちを送り返し、代わりに勇敢な友人たちを招き、3 ヶ月間滞在し徹底的にその家を調べることにする。友人たちは 11 月後半に屋敷にやってきて、それぞれ寝室を割り当てられ、1 月 6 日まで各部屋を毎晩監視することにする。最終日に一同顔を揃えて、自分たちが目撃したものを報告し、無事それぞれバラバラにその屋敷を後にすることになる。結局、その家には幽霊が取り憑いていないことが明らかにされる。

各部屋で目撃した報告については挿話として次のように語られる。先ず第 2 章の Hesba Stretton の“The Ghost in the Clock Room”では、語り手のいとこの John Herschel が自分の妻の話を語るといった体裁を取っている。しかし、この話は Dickens の意図とは違って幽霊が登場しない普通の話になっており、挿話の導入部で何とか物語全体との調和を図ろうとした Dickens の苦心が見受けられる。第 3 章の G.A. Sala の“The Ghost in the Double Room”では列車で見た夢の話が、第 4 章の Adelaide Procter の“The Ghost in the Picture Room”では、部屋に掛けてあったポートレイトが Belinda に過去の聖人伝説の話を思い出させ、第 5 章の Wilkie

Collins による“The Ghost in the Cupboard Room”では語り手自身が幽霊であったという話が、第 6 章の Dickens による“The Ghost in Master B.’s Room”では幽霊が自分自身の子供時代や無垢や空想であった話が、第 7 章の Mrs. Gaskell の“The Ghost in the Garden Room”では、判事の幽霊に自分が取り憑かれているという話が、それぞれ展開される。作品全体を通じて提示される幽霊の共通性は、この屋敷にではなくそれぞれの個人に取り憑いていることを示している。

12 月半ば過ぎにこの物語を読んだ Howitt は、Dickens から同月 12 日に Cheshunt を訪ねたが、当の幽霊屋敷は増築され、すっかり様変わりしてもはや幽霊は取り憑いていない旨の次のような手紙を同月 17 日にもらうことになる。

I have been to Cheshunt, and have found myself no nearer to a haunted house than I was before. Not a locally well-informed person in the place knows of any haunted stories there. The house in which Mr. Chapman lived, has been greatly enlarged and commands a high rent, and is no more deserted than this house of mine is. I can hear of no one at Cheshunt who ever heard of anything worse in it (the house) during Mr. Chapman’s occupancy, than rats, and a servant (one Frank by name), said to have had a skillful way of poaching for rabbits at untimely hours.<sup>8</sup>

Howitt によれば、これは何かの間違いで事実とは違うとして再調査するよう求めると共に、『幽霊屋敷』という物語の題材としてこの Cheshunt 屋敷を用いたのではないかという抗議の手紙を Dickens に送った。しかし Dickens は『幽霊屋敷』で舞台となっている屋敷は Cheshunt にある屋敷とはまるっきり別物であって、このクリスマス特集号が出版される前日まで、調査をするためにそこを訪れないと弁明し、友人である John Forster も何かの間違いであると手紙に書いてよこしたと述べている。その真偽についてはその時点では定かではなかったが、屋敷に霊が取り憑いていなかったことに関しては、後日 Howitt 自身が現地に赴き、Dickens の言った通りであることを確認している。<sup>10</sup>

### III

Dickens が Cheshunt の屋敷を訪れたのが 12 月 12 日頃で、*All the Year Round* にクリスマス特集号として『幽霊屋敷』が出版されたのが翌日の 13 日である。ということは、当然原稿は屋敷を訪れる以前に印刷所に送られていたことになる。12 月 21 日付けの Howitt への手紙が確かなものだとすれば、実際には印刷所に 10 日間あったことになり、12 月 3 日には印刷所に送られていたことになる。またその号の予告を 12 月 3 日号にすでに載せており、更にこの物語は先に述べたように複数の執筆者による合作であるので、Dickens は原稿を執筆者から

集めなければならなかった。加えて、全8章のうち序章(“The Mortals in the House”)と5章(“The Ghost in Master B.’s Room”)と最終章(“The Ghost in the Corner Room”),及びそれぞれの章の導入部を書いている。こうしたことから原稿を書き直したりすることは物理的に困難であることが了解される。ただし唯一文章が付け加えられていると思われるのが3章(“The Ghost in the Double Room”)の最後のパラグラフ(“I Woke Again”)である。これは他の執筆者から集めた原稿に導入部などの付け足しはしているものの、本文を書き直してはいないことを意味する。例えば、6章(“The Ghost in the Garden Room”)を書いた Mrs Gaskell は“*The Crooked Branch*”としてそのまま翌年 *Right at Last and Other Tales* に採録している。特に Mrs Gaskell の場合、その原稿に手を加えなかった理由が物理的に難しかったという他に、以前 Dickens が Mrs Gaskell が書いた物語に勝手に手を加えたことで反感を買ひ、二度としないと確約した経緯があるからだ。また Mrs Gaskell の書簡集が確かなものであるとするならば、Dickens は複数の執筆者に10月1日以前に執筆依頼をしていたことになる。<sup>11</sup> Howitt に「幽霊屋敷」のリストを依頼する1ヶ月も前のことになる。こうしたクリスマス物語が出版されるまでのプロセスを検証してみれば、Dickens が Cheshunt の屋敷を訪問してから、創作したと結論づけることは当然考え難い。むしろ Cheshunt の屋敷に幽霊が取り憑いていようといまいと、それとは別に Dickens は最初からこの虚構物語を書こうと企図していたと理解される。つまり、物語の結末は予め用意されていたのである。

#### IV

虚構テキストには、「この物語はフィクションであり、現実の事件・人物とは一切関係ありません」とわざわざ断る場合もあれば、現実のものではないことを指示する、あらゆる範囲の信号によって、虚構であることを露呈させる場合がある。これが作者と読者の共通認識として、文の一切を描写している虚構世界を指示せよ、というメタコミュニケーションを成立させるのである。ここで用いる「指示」(reference)という言葉は、分析哲学や言語行為さらには虚構論で用いられる指示のことで、個別的な諸事物を指し示し、同定可能ならしめるものである。『幽霊屋敷』という物語テキストが虚構のものであることは、次の2つの点から確証されよう。

##### 1) 「幽霊屋敷」の指示の不特定性

語り手がこれから探索しようとする幽霊屋敷の場所や所有者が特定されおらず、ただ “I was traveling towards London out of the North, intending to stop by the way, to look at the house”<sup>12</sup> と述べられているに過ぎない。これは現実世界におけ

る幽霊屋敷というものの普遍的典型という形で一般化しようとするものではなく、これから語ろうとしている幽霊屋敷が、現実世界で目にする幽霊屋敷に似ているという仕方、虚構世界に存在する幽霊屋敷の個別的な指示に向かうことを示している。これと同様のことが語り手が列車の中で出会った心靈主義者についても当てはまり、この人物は“my fellow-traveller”や“the goggled-eyed gentleman”としてしか描写されておらず、現実世界の具体的な指示を欠いているのである。

## 2) 語り手と作者との不一致

語り手は一人称の「私」(“I”)で物語り、過去の事柄を回想するという形で物語を提示する。やがて語り手は物語の登場人物の一人である“John”という名前の人物であることが明らかにされることで、登場人物の一人でなお且つ物語世界外に指示を持たない物語の語り手は、作者とは異なった虚構の存在であることを示している。この「私」の存在は虚構世界の人物“John”である。K. Hamburgerの虚構論に倣えば、これは言わば三人称小説と同じように、「言語行為主体」である作者と「言表主体」であるテキスト内部における主体である語り手との二重構造の分離がおこり、その結果、物語の主体として知覚される「原点の私」は現実の「言表行為主体」から虚構的な「言表主体」へと取って代われ、現実の作者は後退してしまうことを示している。<sup>13</sup>

こうしたフィクションとノンフィクションとの弁別は、物語世界外に指示を持つか持たないかといった点で主張する Searl<sup>14</sup> などの発話行為論者の観点からと、Hamburger などの虚構的語りの論理の観点からの双方から実証され、物語の虚構性が明示される。要するに、一般の読者にとってはこの物語が虚構のものであることが暗黙の了解事項となっているのである。物語の虚構性を明確にしておくことで、物語のリアリティが損なわれるように思われがちであるが、実際に起こった事実を述べているからリアリティがあるという訳ではない。虚構の文芸的テキストにおいては、読者の現実世界は括弧に括られ、虚構というフレームの内部において仮の現実世界が繰り広げられるのが普通である。その中に読者はリアリティを読み込み、「かのように」とか、あるいは「として」物語内の世界を受容するのである。それ故に物語のリアリティは如何に現実世界に則した想像力が喚起されるかどうかにかかっているのである。これはまた、読者の虚構認知、つまり虚構の判定基準が読者によって左右されることを暗に示しているのである。この『幽霊屋敷』では Howitt は自然的態度を括弧に入れなかった。では彼はこの虚構物語の中にどこに現実世界を読み込んだのであろうか。

## V

Howitt 自身ははっきりと述べてはいないが、その主張の論拠として、おそらく次の4つが考えられる。1) 3回に分けて *Household Words* に掲載された「医者  
の幽霊」(“A Physician’s Ghosts”)<sup>15</sup> を巡る Howitt との手紙のやり取りを発端に  
した Dickens の幽霊屋敷探索が、このクリスマス特集号と同時期に行われよう  
としたこと。2) 向かう方向が違うだけで、物語の中の屋敷が Cheshunt と同じロ  
ンドンの北部郊外にあること。3) その屋敷には幽霊が取り憑いていなかったこ  
と。4) 物語の最初の方に登場する列車に乗り合わせた乗客が、所謂「ラッパー」  
と呼ばれる人物で、列車の中で交霊をしていて、語り手はこの紳士の交霊を  
“poor a piece of journey-work as ever this world saw”として中傷する一方、この人物  
については、“one of a sect for (some of) whom I have the highest respect, but whom I  
don’t believe in”と、語り手である「私」の言葉が Dickens の言葉と受け取れる記  
述があること。<sup>16</sup> 最後のものに関しては、一人称で語られる物語の私が、実は  
“John”であると判明するのは5ページほど読み進まないとわからないのと、語り  
に対してナイーブなヴィクトリア朝の一部の読者から一人称=作者と受け取ら  
れる可能性があったからと考えられる。これに関して言えば、W. M. Thackeray  
が処女長編小説 *The Luck of Barry Lyndon* を *Fraser’s Magazine* に掲載したところ、  
一人称の「物語る私」は作者自身とほぼ同定し得るとし、Thackeray が悪党且つ  
詐欺師である Barry Lyndon と等位に置かれたという事実がある。<sup>17</sup> こうしたことは  
明確とは言えないが、Howitt の読みを可能にする十分な状況証拠と成りうる  
だろう。

この物語において Dickens は、幽霊が取り憑いているのは自分自身であり、  
そしてそこから笑いや愛とペーソスが生まれる、というそれまでのクリスマス  
物語群の流れを継承させた。しかも Dickens の幽霊に対する考えというものが、  
自らの言葉だけではなく、他の執筆者という形をとることにより、象徴的に表  
されていると言ってもいいだろう。なぜならばそれによって Dickens の考えが他  
者によって支持されていることを示しているからである。しかし読者 Howitt が  
自分への当てこすりとしてこの物語を読み解いたように、Harry Stone をはじめ  
とするこうした一連の経緯を周知している批評家たちも、この虚構物語を  
Howitt と心靈主義に対する諷刺であると結論づけた。<sup>18</sup> しかし、Dickens は  
Shorter と Howitt から仕掛けられた論争を無視したばかりでなく、論争すらな  
かったと言い放つ。そこに Dickens のもう一つの企図が見えることになる。

新聞・週刊雑誌は19世紀になると大躍進を遂げることになる。1712年の印紙  
税を機会に新聞に連載小説が掲載されることになるが、オリジナル小説は記事  
と見なされ課税の対象となるためリプリントものがほとんどだった。また1725

年の新しい印紙条例により小説の連載が新聞から雑誌へと移ったが課税対象が同じなため相変わらずリプリントものが中心であった。そして 1819 年の新しい印紙条例により新聞とは 27 日間に 2 回以上発行される 2 シート未満の定期刊行物を指すということが明確になり、月 1 回発行の雑誌は税を免れることとなる。これにより各種の月刊雑誌が次々と発刊され、読者を引き寄せる目的でオリジナル小説が連載され始めた。しかしその対象読者となったのは 2 シリング 6 ペンスの雑誌でも買う余裕のある比較的裕福な中流階級であった。1860 年代になると出版諸経費の低廉化に伴い 1 シリングに値下げされ、月刊雑誌の連載小説は繁栄の一途を辿ると同時に中流階級以上の読者数も増大することとなる。その一方で、1830 年代頃から下層階級の読者を対象とした粗悪で低俗なペニー雑誌も刊行されていたが、中流階級の読者は嗜好の相違とプライドの点でそのような出版物を敬遠した。このように当時の読者層はハイブラウとロウブラウに二極分化していた。雑誌の売れ行きはそれに載る作家の知名度や小説の評判に左右されたと言われたように、月刊雑誌はこぞって著名な作家の小説や読者の嗜好と合致したものを掲載していたが、やがて *Household Words* に代表される 2 ペンスという安価な週刊雑誌が出版され、Dickens や Collins そして Mrs. Gaskell といった人気の高い作家の小説が連載されるようになり、好評を博すことになる。<sup>19</sup>

Collins は何よりも先ず読者を満足させることを第一に考え、しかも彼は読者層を “Readers in Particular” と “Readers in General” に分け、特に後者を「未知なる大衆読者」(Unknown Public) と呼びこれを重要視した。この読者というのは、安価なペニー雑誌を愛読した労働者を中心にした下層階級で、Collins の計算によるとその数は 300 万人以上であったとされる。<sup>20</sup> Collins が寄稿していた週刊雑誌 *Household Words* の主幹者である Dickens は、この雑誌がどのような読者を想定しているかについて、“We hope to be comrade and friend of many thousands of people, of both sexes, and of all ages and conditions, on whose faces we may never look.”<sup>21</sup> と述べている。この週刊雑誌の目的は明らかに読者層の拡大にあり、上・中流階級のみならず、下層階級をも対象読者とし、その充実した内容と Dickens の名声のおかげで少なくとも上・中流階級の読者が抱いていた低俗で扇情的であるとする偏見を取り除いたと言える。この流れを受け継いだのが *All the Year Round* で、当然この『幽霊屋敷』もクリスマスの読み物として同様の読者層を意識しており、それに相応しい愛と幸福で物語を締めくくると共に、*A Christmas Carol* や *The Chimes* を始めとする Dickens のクリスマス物語群と同じく、ここでは Mr. Governor と John の妹 Patty の結婚というそれに相応しい愛と幸福で物語を締めくくり、次のようにクリスマスの言葉が最後に添えられているといった体裁

を整えている。

Finally, I derived this Christmas Greeting from the Haunted House, which I affectionately address with all my heart to all my readers: — Let us use the great virtue, Faith, but not abuse it; and let us put it to its best use, by having faith in the great Christmas book of the New Testament, and in one another.<sup>22</sup>

一般の読者にとっては、最初の部分に登場する交霊者とこれから訪れようとする幽霊屋敷との因果関係も、幽霊の登場を予感させる役割しか果たしてはいないし、実際には幽霊屋敷に幽霊が取り憑いていなかったことと、Dickens 自身が Cheshunt の屋敷で確認してきたこととの関係など全く知るよしもない。しかも、物語が掲載される前日に Dickens が現地を訪れていることから、もし仮に Cheshunt の屋敷に幽霊が取り憑いていることがわかったとしても、このままこの物語は世に出ていたであろうことは、物語の予告と合作という形態から明白である。そうであったとするならば、心霊主義に対する中傷はあったにせよ、両者の間の論争などへは決して発展することなどなかったはずである。『幽霊屋敷』を前後して2つの心霊主義を中傷する記事が *Household Words* と *All the Year Round* にそれぞれ掲載されたけれども、<sup>23</sup> それに関しては何の反論も寄せられていないということがその傍証と成りうるだろう。

この『幽霊屋敷』は、そうした事実関係があったが故に、一般大衆読者にとっては、楽しい愛とペースのそれまで Dickens が描き続けてきたクリスマス物語の一つとして、そして Howitt にとっては自分と心霊主義に対する諷刺として、二種類の読みを必然的に許容してしまう虚構の物語テキストに成り得ているのである。それは正に Dickens が仕掛けた通りの展開であったかもしれない。これでもって彼は心霊主義に引導を渡すことになるはずだった。ところが、これを機会に Howitt や Shorter を中心とする *Spiritual Magazine* が以後 10 年に渡り隆盛を迎え、向かうところ敵なし状態となる。<sup>24</sup> 結果として、挑発に乗ったかに見える Howitt と Shorter の方が一枚上手だったことは、Dickens にとっては皮肉だったと言わざるを得ないだろう。

## 注

\* 本稿は第 74 回日本英文学会での口頭発表に加筆修正を施したものである。

<sup>1</sup> Walter Theodore Watts-Dunton, *The Coming of Love and Other Poems* (London & New York: John Lane, 1899), 191. 及び *Dickens: The Critical Heritage*, ed. Philip Collins (London: Routledge and Kegan Paul, 1971) 502.

<sup>2</sup> Dickens と心霊主義との出会いは、*Household Words* No.139 (1852 年 11 月 20 日)に

“Rappers, or the Ghost of the Cock-Lane Ghost”が掲載されてからである。この記事は Dickens ではなく Henry Morley というレポーターによって書かれた。N. C. Peyrouton, “Rapping the Rappers: More Grist for The Biographers’ Mill.” *Dickensian* 53 (1957): 19-33, 75-89 を参照。

- <sup>3</sup> “To UNKOWN CORRESPONDENT [?]JANUARY-3 SEPTEMBER 1860]” *The Letters of Charles Dickens* vol.9. ed. Graham Storey Pilgrim Edition (Clarendon, 1997) “Of course I have no need to tell you that there has never been such a thing as a “controversy” between me and Mr. Howitt.”
- <sup>4</sup> “To WILLIAM HOWITT [6 SEPTEMBER 1859]” *The Letters of Charles Dickens* Vol.9. “I have always had a strong interest in the subject, and never knowingly lost an opportunity of pursuing it. [...] I would not believe—could not believe—in your War Office ghost, without overwhelming evidence.”
- <sup>5</sup> “To WILLIAM HOWITT [31 OCTOBER 1859]” *The Letters of Charles Dickens* Vol.9. “I will only add on the general subject that if you know of any haunted house whatsoever within the limits of the United Kingdom where nobody can live, eat, drink, sit, stand, lie or sleep, without spirit-molestation, I believe I can produce a gentleman who will readily try its effect in his own person.”
- <sup>6</sup> “To WILLIAM HOWITT [15 NOVEMBER 1859]” *The Letter of Charles Dickens* Vol.9. “My friend—whom you altogether mistake for somebody else whom I don’t know of—has an idea of taking the haunted House at Cheshunt altogether. Can you tell me to whom application should be made about it?”
- <sup>7</sup> 物語における各章のタイトルと執筆者は以下の通りである。

#### THE HAUNTED HOUSE

The Mortals in the House . . . . . By Charles Dickens.

The Ghost in the Clock Room . . . . . By Hesba Stretton.

The Ghost in the Double Room. . . . . By G. A. Sala.

The Ghost in the Picture Room . . . . . By Adelaide Procter.

The Ghost in the Cupboard Room. . . . . By Wilkie Collins.

The Ghost in the Master B.’s Room. . . . .By Charles Dickens.

The Ghost in the Garden Room . . . . . By Mrs. Gaskell.

The Ghost in the Corner Room . . . . .By Charles Dickens.

(“The Content Page” from the collected edition (1868) of the extra Christmas numbers of *All the Year Round*.)

- <sup>8</sup> “To WILLIAM HOWITT [17 DECEMBER 1859]” *The Letters of Charles Dickens* Vol.9.
- <sup>9</sup> “To WILLIAM HOWITT [21 DECEMBER 1859]” *The Letters of Charles Dickens* Vol.9. “[...] the Christmas No. which gives you so much offences, and the Cheshunt House, are two perfectly distinct things. I went to Cheshunt to make enquiries, the very day before the Christmas No. was published, and when it had been at press ten days. [...] The Mr. Forster of the Oriental club [...] wrote me a letter so clumsily describing a letter he had from you [...], there must be some mistake. [...] I found the house in which Mr. Chapman had lived four years, altered, enlarged,

increased in rent, and prosperously inhabited. I hope that is sufficient for your satisfaction, but I found nothing else [...].”

- <sup>10</sup> Harry Stone, “The Unknown Dickens,” *Dickens Studies Annual* Vol. 1 (New York: AMS, 1980) 12.
- <sup>11</sup> “George Smith 42 Plymouth Grove—Saty [?]1 October 1859)” *The Letters of Mrs Gaskell* ed. by J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (Manchester UP, 1966), 577. “[...] ( I am going to write an article for their Xmas Number, “All the Year Round” I mean ) [...] .”
- <sup>12</sup> *The Haunted House*. Christmas Number of *All The Year Round* (1859) 1.
- <sup>13</sup> Käte Hamburger, *The Logic of Literature* (1957; Bloomington: Indiana UP, 1973 ) [ケーテ・ハンブルガー, 『文学の論理』植和田訳, 松籟社, 1986年] .
- <sup>14</sup> John R. Searle, *Speech Acts, an Essay in the Philosophy of Language* (Cambridge UP, 1969) [J. R. サール, 『言語行為』坂本・土屋訳, 勁草書房, 1986年] .
- <sup>15</sup> “A Physician’s Ghost” *All the Year Round* (August 6, 13 & 27, 1859), 346-50, 382-84 & 427-32.
- <sup>16</sup> *The Haunted House*, 1-2.
- <sup>17</sup> 物語の主人公 Barry と同一視された Thackeray は後に “The service about which Mr. Barry here speaks has, and we suspect purposely, been described by him in very dubious terms.”とこの一人称小説に批判的距離をもって読むようにと, 若干の註を補足したりした。「物語る私」は Thackeray ではなく Barry であることを読者に認識させる為に, 作者 Thackeray は Barry を三人称で指示する註を付与することで, 「物語る私」は Barry であることを示したのである .
- <sup>18</sup> Harry Stone, 22. “it also performs the *Carol* or the *Chimes* function of attacking the abuses of the day: in 1859 the target is Howitt and the abuse of faith.”; Peter Ackroyd, *Dickens* (Minerva, 1990) 918-9. “It was then the idea occurred to him; he decided to call the Christmas story sequence ‘The Haunted House,’ and under his direction it became a systematic satire against the proponents of psychical phenomena.”
- <sup>19</sup> Richard Altick, *The English Common Reader* (Chicago: U of Chicago P, 1957)及び清水一嘉, 『イギリス小説出版史』(東京, 日本エディタースクール出版部, 1994年)を参照 .
- <sup>20</sup> Wilkie Collins, “Unknown Public,” *Household Words* Vol.18 (August 21, 1858) , 217-22.また Collins が如何に読者を意識していたかについては, Sue Lonoff, *Wilkie Collins and His Victorian Readers: A Study of Authorship* (New York: AMS, 1982)を参照 .
- <sup>21</sup> Charles Dickens, “A Preliminary Word,” *Household Words* Vol.1 (March 30, 1850): 1.
- <sup>22</sup> *The Haunted House*, 48.
- <sup>23</sup> “Well-Authenticated Rappings” *Household Words* (February 20, 1858), 217-220. ここでは心霊主義を諷刺している . “Rather A Strong Dose,” *All the Year Round* (March 21, 1863): 84-87. これは心霊主義に関する本を批判をしたもの .
- <sup>24</sup> Janet Oppenheim, *The Other World: Spiritualism and Psychical Research in England, 1850-1914* (Cambridge: Cambridge UP, 1985) 45.